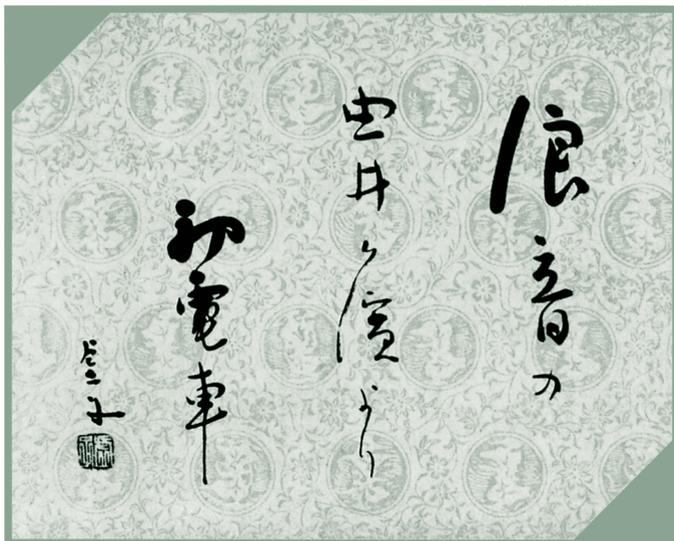


詠 詠 集 方

九 月 号



花鳥諷詠[®]



令和2年9月 ■ 第390号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	木村 享史	2
	小川 龍雄	4

第十六回国際俳句シンポジウム		7
----------------	--	---

虚子研究 虚子宛書簡を読む (十四)		
明治二十四年五月二十二日 (封書)	小田 直寿	10

虚子研究 『六百五十句』 研究 (9)		19
---------------------	--	----

一頁の鑑賞	椋 則子	24
	小川みゆき	25

令和三年 (2021年) 俳句カレンダー募集句入選者		26
----------------------------	--	----

この人の作品	西村正一郎	28
--------	-------	----

地区行事開催日程表		31
編集後記		32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

木村享史 選

特選五句

雛飾りつつ 早世の母思ふ 香川 福家 市子

自らに声掛けて立ち草取女 高山 大下 雅子

木道を小紋に染めてえご落花 稲城 興 正子

夏料理運ぶ両手の濡れてをり 小諸 丸山 ま美

旅予定消えて鞆と夏帽子 高松 中浦 霞

二句短評

一句目——早世と言っても何時頃のことなのか、作者の物心つく前なのか後になつてのことなのかのうか。

その母が買うてくれた雛、今にしてはもう飾る度にか惚ぶことはない、遠い日の母への思慕が悲しい。

二句目——狭くもない庭に出て、烈日に晒されながら草取りにいそしむ、年を経たひとりの女性がいる。

何かの用を思いつき、立ち上がろうとするにも気合を入れての——声が必要、身心は健康なのである。

入選六十句

母の日のアルバムの母割烹着 豊中 室田 妙子

紫陽花の母恋ふ色となる忌日 太宰府 柴田慧美子

風と来て光の中へ夏の蝶 草津 田中 幸湖

紫陽花のはじめの色を雨濡らす 浜田 田中由紀子

自粛して葉桜の池ひと巡り 富田林 鶴岡 言成

あるがまま生きて傘寿の更衣 大牟田 石橋 武子

休校の子のぶらんこを思ひつきり 大牟田 岩永美智子

川のある下町の風夏めける 千葉 高橋 靖夫

何も彼も緑の風の染めてゆく 大牟田 西坂美也子

命あるものみな光る風五月 宮城 山家登志子

変化なき老の日々なり胡瓜植う 神戸 堅田サチエ

登校の始まる子等に風薫る 春日 永利五十鈴

あめんぼう水つかまへて捉まへて 神戸 田中 良子

雨はれて風立ちあがる谷若葉 白岡 小林カヨ子

翼持つ如くに風の燕子花 長岡京 藤堂くにを

新緑の中に廃校ぼつねんと 高知 栗坂 海馬
 まづ庭の牡丹に案内してくれし 徳島 吉田 有子
 退院の青葉明りに薄化粧 高松 三宅 博子
 籠り居の解けて何時しか万緑裡 山形 揚妻 愛子
 隠沼といへぬ輝き未草 大分 橋本 照子
 出征の父との別れ麦の秋 南国 高橋 以登
 六月来地球丸ごと病みしまま 下関 岡本 恒子
 子の一家蚊帳を畳みて帰りけり 大牟田 猿渡 章子
 やうやくに休校解けし桜実 砺波 田上真知子
 川風のいつか夕風月見草 たつの 竹内 澄子
 草を引く朝月高く残りをり 羽生 樋口レイ子
 太陽に焦げ麦秋の匂ひ立つ 高崎 温井 公子
 出来ぬ事より出来る事探す初夏 茨木 田村 椰子
 鎌倉の谷も史跡や余花に会ふ 三鷹 永嶋千恵子
 衣更へ心新たに自肅かな 箕面 須知香代子

桐の花無性に母に逢ひたくて 千葉 鈴木真沙枝
 薫風を入れコーヒーの香と家居 高松 真鍋 孝子
 ウイルスと戦ふ地球夏の月 熊本 宗像 和子
 あぢさゐも棚田も雨を待つ風情 糸島 占部ゆき江
 ぼつかりと朝より空いて梅漬ける 浜松 大庭よりえ
 もう少し生きてみようか汗拭いて 香川 湯川 雅
 句碑の辺にきのふ無かりし梅雨の茸 長岡 笠原佐千子
 傘一つ乾して無音の安居寺 東大阪 中田 豪起
 野も山も街もみどりに膨らみ来 札幌 押野 美江
 待ちわびし句座六月に集ひけり 伊賀 永井二紗子
 家居強ひられて仏と豆の飯 朝倉 井上 醇女
 乳呑子の泣いて太つてゆく五月 出雲 谷 すみれ
 解禁のその日の鮎をもらひけり 金沢 吉田みはる
 六月の玻璃の雫のみどりいろ 神戸 池田雅かず
 藤の香を仰ぎ羽音を恐れけり 今治 此留木のぶ子

朝駆けの一騎消えゆく夏野かな 福岡 工藤 友子

いきなりの雨蛙鳴く厨窓 総社 一安 泰子

堰板を田毎確かめ溝浚へ 松原 吉村美穂子

水無月や墨絵のごとく湖静か 川崎 秋間 玲子

螢火の消え沢音の闇戻る 奈良 水上 末子

夏帽子声の届かぬ人に振り 浜田 俵 保恵

整列の赤美しやさくらんぼ 芦屋 山岸 正子

つながれしままコロナ禍の貸ポート 生駒 南 純子

集合の刻待つ園の夏木蔭 宇佐 武石富美子

一匹の蟻一匹の虫を曳く 南国 竹村あきを

緑蔭に園児らの輪の赤青黄 尾張旭 佐藤 武彦

あぢさゐの雨の雫も活けにけり 伊賀 西澤与志子

睡蓮の正午や池の盛り上がる 名古屋 斉藤 始子

命日の墓参を済ませ梅雨に入る 我孫子 柳沢いわを

灯を消して一点赤き蚊遣香 福岡 山口 裕子

●小川龍雄選

特選五句

水槽の金魚長寿や診療所 大村福田 洋子

一人より二人が楽し草を引く 伊賀子 日康子

自らに声掛けて立ち草取女 高山大下 雅子

母の日や何より嬉し子の言葉 高松藤岡 孝子

一匹の蟻一匹の虫を曳く 南国竹村 あきを

二句短評

一句目——地域医療を担う診療所。その待合室に置かれた水槽に何年も前から金魚が飼われている。金魚も長寿だなど感じた作者だが、患者も医師も金魚もみんな長寿なのではないだろうか。

二句目——単調な作業を延々と繰り返す草取り。足腰は痛くなるし、何時終わるとも知れない草との格闘のような作業である。二人でおしゃべりでもしながらの草取りで少しでも気が紛れた。

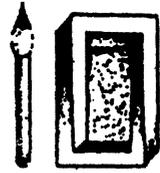
入選六十句

風来ては運ぶ命や草の絮 熊本 井芹眞一郎
 掴まれるものを掴みて胡瓜蔓 厚木 黒山 敏恵
 羅の風のやうなる立居かな 鹿見島 平山 洋子
 人去れば風が漕ぎだす半仙戯 久留米 矢野 愛子
 ウイルスの紛れしままに夏に入る 由布 立川さよ子
 びくりともせぬ浮子見詰め波止日永 高松 森本 添水
 万緑や風の静止の刻ありぬ 金沢 荒谷みえ子
 木蓮の咲きつつ錆びてゆきにけり 八千代 向阪 由紀
 仰ぎ見る高さに咲けり朴の花 白山 岩本 松江
 筍の吐く水に濡れ荷の届く 東京 庄嶋 里子
 道路より目と鼻の先栄螺舟 石川 宮下 末子
 退院の青葉明りに薄化粧 高松 三宅 博子
 三線の流るる路地や島薄暑 神戸 柏原 憲治
 子燕や真一文字に口を閉ぢ 平塚 渡邊 久也
 夕菅の咲いて山家に灯のともる 大牟田 鹿子生憲二

美しき文懐かしと新茶汲む 上越 橋詰シズエ
 溝浚へして芽生え来る命かな 神戸 石角 節子
 太陽に焦げ麦秋の匂ひ立つ 高崎 温井 公子
 久々にリュック背負ひて夏帽子 高松 山地 ゆき
 蛞蝓の意志まつすぐに伸びにけり 春日部 吉川あかし
 どくだみの群るる狭庭の白眩し 宇部 縄田 悦子
 不条理もこの世の習ひ水を打つ 金沢 瀬古 祥子
 桜貝裁縫箱の抽出しに 始良 村岡多津女
 万緑や旅の一座の野外劇 神戸 藤澤みか子
 月の面にふはり螢の点となり 周南 河村よし子
 疎に密に重なり合へる庭若葉 天童 村形 嵩子
 豆めしや今宵は家族揃ふ筈 豊田 杉本 淑代
 子等の声戻る校庭若葉風 宇佐 尾崎 陽子
 見渡せる植田の色の遅速かな 十日町 小川 則子
 野も山も街もみどりに膨らみ来 札幌 押野 美江

髪洗ふ未だ自肅は解かぬまま 鎌倉 緒方 初美
 十葉の白は沈まず闇探し 熊本 隈部 輝子
 万緑の吐息洩れ来る峡の風 藤井寺 中村 佳子
 子燕や末子らしきも飛び立てり 大阪 上西左大信
 解禁のその日の鮎をもらひけり 金沢 吉田みはる
 マスク付け忘れて戻る薄暑かな 久留米 後藤 隆
 植田まだ細波ばかり立つてをり 今治 横田青天子
 直球となり巢に戻りたる燕 七尾 松本 慶子
 寝返りに挑むみどり児柿若葉 西脇 岸本 悦子
 好物の鮎美しく夫食めり 金沢 中田 康子
 万緑や峡のトロツコ見え隠れ 金沢 広島 明臣
 近寄りて天頂に消ゆ朴の花 三鷹 橋本 忠之
 雨あがり十葉の白立ちあがる 東京 鈴木サキ子
 夏帽子声の届かぬ人に振り 浜田 俵 保恵
 かばかりの十葉干して恙無く 朝来 枚田登志子

普段着の気楽な余生更衣 平戸 辻 美彌子
 夏料理運ぶ両手の濡れてをり 小諸 丸山 ま美
 船窓の海傾けて卯浪立つ 西宮 山谷 彰子
 母も来て挿し苗をする植田かな 姫路 高島規容子
 入梅の先づ青空に始まりぬ 宇部 爲近 正子
 老鶯や散歩の路の明け初むる 宇佐 水野 公明
 新茶汲む正座の横にあぐらして 新見 黒杭 良雄
 結界を越え十葉の今盛り 井原 坂本 一恵
 弟はいまも少年目高飼ふ 宝塚 二瓶美奈子
 一枚田編み込んでゆく田植かな 宇部 鈴川 礼子
 風薫る野点の席も和やかに 金沢 宮村 啓子
 紫陽花の毬の重さを剪りにけり 菊池 川口 二子
 ベンチ守る正選手より日焼して 八尾 浅井 祥多
 海風に浮き立つ気配夏帽子 西東京 今井 名津
 灯を消して一点赤き蚊遣香 福岡 山口 裕子



編集後記

荒れもせで二百二十日のお百姓

虚子

立春から二百十日目の九月一、二日
前後は気候の変わり目で暴風雨になる
ことが多く、それより十日後の二百二
十日も台風が恐れられ、農家では厄日
とされているそうです。

今年はいこれ以上何ごともないことを
祈るばかりです。

募集句だけとなりました今年の全国
俳句大会ですが、全国の皆様から五千
八百余りのご投句をいただきました。

皆様のご厚意に感謝申し上げます。縮

め切りを通常より一か月伸ばしました
ので、ただいま選考が終わる頃です。
句集がお手元に届くのは十一月頃、

「花鳥諷詠」の掲載は十二月号の予定
です。もう少しお待ちください。

今月より協会賞の募集が始まりまし
た。一年の集大成です。ぜひ、三十句

ご応募ください。お待ちしておりますま
す。詳細は広告ページをご参照くださ
い。

来年のカレンダーも完成まじか
す。来年はより良い年になることを祈
りながら作りました。虚子がお酒を飲
んで浮かれた気分を描いたという書と
団扇絵を掲載。少しでも皆様のお気持
ちが明るくなれば幸甚です。予約受け
付け中ですのでお早めにお申し込みく
ださい。

(須川)

●花鳥諷詠選選者予定

掲載	締切り	選者
12月号	9月20日	稲畑汀子 田中静龍
1月号	10月20日	木村享史 荒船青嶺
2月号	11月20日	稲畑汀子 成田一子
3月号	12月20日	木村享史 岩田公次

花鳥諷詠九月号(通巻第三九〇号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇、〇〇〇円

令和二年九月一日

発行人 稲畑汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シヤンプル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇二六〇七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二